

日向の二日旅

——伊東満所が母の事ども——

濱田青陵

一、はしがき

昭和十年の暮のおしつまつた頃、私は梅原、小林、松原三君等と、筑前飯塚市の南桂川の裝飾古墳の調査撮影に赴いたが、狭い墓室の中で一向役にも立たぬ老人がウロウロしてゐるのは却つて仕事の邪魔になるかと思ひ、其の間を利用して久方振に日向宮崎へ足を伸ばし、今は二十餘年の昔發掘した西都原の古墳をも見、且つは兼ねて訪ね度いと思つてゐた天正遣歐使節の一人、伊東(藤)満所(マシキヨ)の生れ故郷都(すのこり)郡の城址から、飢肥の城下で近年發見の満所が母町上氏の墓碑にも謁しようと、門司から日豊線で宮崎へ向つたのは十二月二十一日の朝であつた。

日向の二日旅

汽車は宇佐から明應の畫像石や富貴の大堂などある國東半島を横ぎり、別府で降りた若い二人連れの女の方が、車中に手袋を片手忘れたのを渡してやつて、エラく感謝せられてから——その代りか歸洛して後自分自身の手袋が片方なくなつてゐるのに驚いた——中谷君が病を養つてゐる由布院、磨崖石佛の調査に思出深い大分と臼杵を過ぎ、驛賣りの蜜柑にも名高い津久見では、何處にフランシスコ大友宗麟の墓があるかと思廻してゐるうちに、いつの間に出來たか海軍の航空隊のある佐伯に出で、延岡に着いては二十年前に比べて其の工業的發展の目醒しいのに目を見張つた。會ては黒板博士等と共に神戸から細島へ船で渡り、夜も明けやらぬ冬の味爽、こゝを發つて圓太郎馬車に搖られて、夕暮宮崎へ着いた明治の末年

の事、さては若山甲藏君と炬燵を馬車のうちに擔ぎ込んで高千穂へ行つた時の事など思ひ出しては、食堂の小さい女給仕が持つて来るビラを數へても十回に近い此の單調な汽車の長旅にも感謝せざるを得ない。高鍋あたりから日が傾いて、瀬之口君に迎へられて宮崎の神田橋旅館へ着いたのは夕暮六時頃であつた。

西都原古墳の發掘に始めて來た大正元年の冬、坂口、黒板兩先生をはじめ、増田、今西、關、柴田等の諸君と共に此の宿で年を越し愉快に過ごした事、長谷部、榊原兩君と落合つた大正六七年頃の事など、此の神田橋の旅館にからまる私の追憶は實に深いものがある。——而かも此等師友のうち、坂口、今西、増田、榊原諸氏は、今は已になき數に入つてしまつた。——西都原古墳の發掘にして若しも我國考古學の進運に大なる刺戟を與へたものとすれば、此の神田橋旅館の女將キヨ子夫人が、探算を離れての歡待厚遇は、確に我々をして遠く足を屢々宮崎に運ばしめるに大なる拍車を與へたもので、此の意義に於いて彼女も亦た我が考古學界の一恩人と云ふ可きであら

う。十數年振りに彼女と相會することを最大の樂みにしてゐた私は、其の姿を見せないのを訝しみながら、女中に尋ねると、「奥様は此の年の四月に六十九歳を一期としてお果てになりました」と云ふ。あゝ何事ぞ、我が來ることの遅くして、彼女の逝くことの早かりし。私は暫くたゞ悵然として長大息するのみであつた。大淀の巨流に臨む此の樓上の眺めは、其の部屋、其の調度と共に女將在世の昔ながらと異らねども、而かも故人はあらず。一人淋しい夕食の箸を措いて、寒夜湯タンポを友として褥中に入れば、往年の記憶繪卷物の如く去來して眠をなさず。

二、西都原と茶臼原

翌朝起きいで、朝食前の熱い牛乳にも女將のありし日を思ひ、「あゝ淋しいな」と語りつゞくれば、女中は「先達でも某師團長が御泊りになり、女將のお骨を納めてあるお寺に參詣されました」と云ふのは實にもと思はれた。今日は一天雲もなき冬の快晴を喜びつゞ、八時半瀬之口君と共に宿を出で、縣の自動車で先づ宮崎神宮に參

拜、徴古館を一瞥してから、蓮ヶ池を過ぎ妻に向ふ。二十年前の記憶は朧けにして、いつしか車は霜だけの西都原の墓地をかけ登り、男狹穂塚女狹穂塚の御陵墓傳説地に到れば、今井監守に迎へられ、やがては妻中學の松本校長、久保文學士等一行と相會することが出来た。曾ては雜木生え茂りて、其の形も見定めがたかつた此の二塚も、今は荆棘を開いて其の整然たる墳形を辨することの出来るのは嬉しい。女狹穂塚の完備した三成耳附前方後圓墳たることは云はずもがな、埴輪圓筒は墳上の外、堤上にもあるたゞ男狹穂塚も同形であつたのを、女狹穂塚の造營に方つて前方部を破壊したのであらうとの説は信じ難く、是はやはり高い三成の圓墳であつて、或は其の前面に短い丘壟を附した一種特有の形式と見る可く、埴輪圓筒は未だ見當らず或は前方後圓形の完成に至る過渡期のものとする^③ことが出来る。たゞ斯かる形式のものが畿内地方などに多く見られぬこととは不思議である。二つの塚を隈なく踏査してから、南方にある低平な圓墳や玉蟲の翅と鏡の出た塚などを見、女狹穂塚の前に出づれば、其の參拜所の設備などの整備

したことは驚くばかり。曾て我々の掘つたことのある方墳を望み、昔の様に馬に騎つて閉口する心配もなく、車に乗つて鬼の窟古墳を訪ひ、國分寺に下りて、以前には見たかも知れないが注意もしなかつた木食上人作の面白い下手作の佛像を賞して、大阪屋旅館の中食に招かれた。此の宿も曾つては黑板先生など一緒に、第一回の發掘の時泊つたことのある舊蹟であつて、宮崎の宿に引きかへ老主人はなほ嬰鑠として昔を語るのも嬉しかつた。

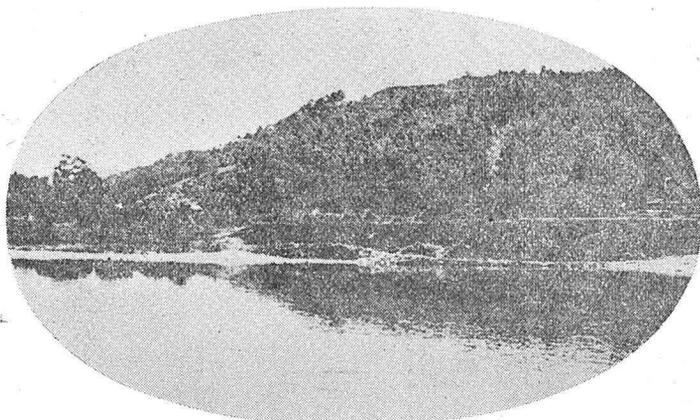
晝食の座で私は妻中學校にある郷土の青年史家原田仁君苦心の作に係る男狹穂女狹穂兩塚の模型地圖を見るところを得たが、やがて妻町長も來會せられ、一同車を列ねて西都原の北方にある茶臼原の古墳群を見に行くことにした。こゝは以前は發掘に忙しく訪れることが出来なかつた處である。茫茫たる草原のうちにある大前方後圓墳に登つて展望したが、なほ東方新田原には石船塚とて一墳に數石櫛のある面白い古墳があると聞いただけで暇がないので割愛し、車を返へして妻の東方一里半許(佐土原の西方一里許)の都於郡に赴くことにした。

三、都於郡城址

都於郡ミコトノと云ふ城が此の西都原から遠からぬ處にあることは、つい近年まで私は氣付かなかつた。天正歐使節の事を調べてゐるうちに、其の主席大友宗麟の使者たる伊東(藤)鍾滿トクミツ所祐益シユクマスが、羅馬の市民權を贈られた時の決議文に

*Illius. et excelimus. Dnus Man-
tius, Xurinsque Mson. Tonocuri
filius, Regis Fimnga ex filia Ne-
pos, Regi Empei.....* ホムカムバ
ニ・ルドウ
イサ探銀文書第三三號、
日高文學士論文(史學雜誌)

即ち「都於郡王の子、日向王の娘に由りての孫、修理亮(祐)益」とあることから知つたのである。而かも實際は滿所が羅馬に行つた頃より數年以前、天正五年(一五七七)伊東氏は都於郡を没



都 於 郡 城 遠 望

落して居り、同じ十五年南那珂郡ナカノ飯肥イヒに封ぜられるまで

は、伊東氏一族は豊後の大友氏に寄食流浪して居たのであるから、最早都於郡國主ではない。併し滿所は歐洲旅行中飯肥に落付いた事を恐らくは知るまいし、とにかく「都於郡王」と云つてゐるのは、都於郡最後の領主三位入道義祐若くは其處に居住してゐた父祐青シユホキョウを稱したものであらう。(なほ彼が大友宗麟の外孫であるか無いかの問題は、後に述べることにする)併し兎に角滿所は此の都於郡に生れ、且つ其の幼年を送つた思出で深い土地であることは想像せられるのである。

我々は妻から一旦佐土原に出で、丘陵の間を西走して都於郡に出たが、伊東氏花やかなりし頃は、佐土原と都於郡の間一里

が程は、人家も連続した町續きであつたと云はれ、義祐自身は支城たる佐土原に居つて、本城都於郡は嫡子義益、次いで其の死後は嫡孫義賢を居らしめたとのことである。^⑤なほ古く景行天皇熊襲親征の時駐驛の高屋の行宮は、都於郡の南黒貫の地であるとも傳へ、都於郡の名は建久國田帳に「都於郡百五十町」と記され、土豪土持氏が地頭であつたが、後ち伊東氏の領有に歸したものであらんと云ふ。^⑥

小學校の横で車を下り、右手に聳ゆる舊城址に向つたが、路傍に「日本最初遣歐使節伊東滿所誕生之地」と云ふペンキ塗りの無風流な白い大標木が建つてゐるのには驚いた。叢林の下なる本丸に登りつくと、其處にも同じ標木がある。固より此の本丸で滿所が誕生したと云ふのではなく、都於郡城の中心として此處を標したのであらう。伊東氏の一族は都於郡から佐土原其他諸縣郡など各地に分散して居つたが、所謂伊東氏四十八城主のうち、滿所の父祖修理亮の名を見出さないうし、彼が特に羅馬に在つても「都於郡王の子」と云つてゐる所から見ても、伊

東十二人衆の一人たる彼の父祐青は、此の都於郡城下に住んでゐたと思はれる。一支族たる彼が勿論本丸に居住してゐたとは考へられぬ。併し其の夫人は義祐の五女であり町上殿と呼ぶ所から、町の上手城内に近い一の丸邊、或は今小學校のある邊りに其の邸があり、其處で滿所が呱呱の聲をあけたとも想像せられるのであるが、之も見て來た様な空談に過ぎない。さて本丸の南手にある高屋山陵と傳へられる處を拜し、^⑦大手口の方に下つて、右手に折れ、今は遊園地となつてゐる昔の西丸に上ると、折からの西日に脚下の荒武川の流れば銀の如く輝き、西都原の墓地を前として、西は遠く東諸縣の山々が連つてゐる壯觀は、流石に物見城と云はれたのも理である。^⑧滿所も恐らく屢々母に伴はれて、或は同年輩の義賢などと共に此の物見城に登り、嬉戯したことであらうし、遠く遠西に使してもチベル河畔夢は屢々此の荒武川岸の丘に馳せたに違ひない。瀬之口君は遠く西方を指して法華嶽東諸縣郡八代村のある處を示し、法華嶽の藥師堂には其の天井に滿所の父祐青の名や「慮外々々」等の文字を墨書したの

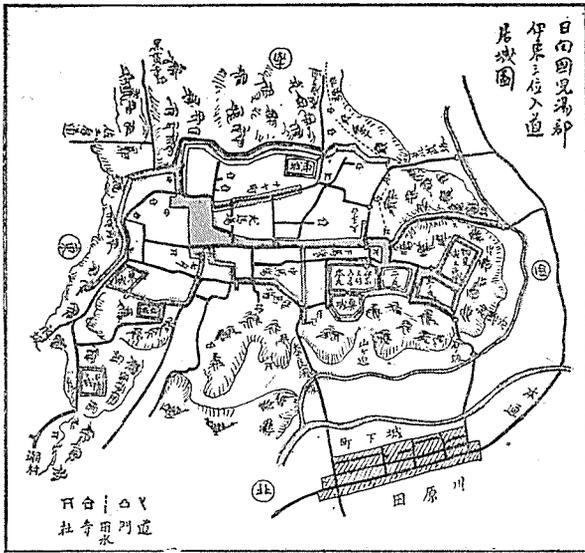
が残つてゐると云ふ。^⑨

さて満所祐益が日本出發の時即ち天正十年(一五八二)

は彼の十三歳(或は十五歳)の時であつたとすれば、其の誕生は元龜元年(一五七〇)であり、伊東氏都於郡落の時は恰も其の八歳(或は十歳)の幼年である。三位入道義祐は佐土原に隠居して後も嫡子義益は早く死に、孫義賢は幼少であつたので國政を執り、其の驕慢と失政とは愈々衆望を失ひ、元龜三年飯野川の合戦には島津勢と戦つて、伊東

修理亮^{滿所}の父^{祐青}が同新次郎、同又次郎等は大敗し、天正の初めには「文モ武モ皆絶へ果ル國ナレバ、況シテヤ仁義禮

智信ナシ、ツラノ國家ノ體ヲ見ルニ衰イ哉五常ヲ以テ五逆トス」云々と云ふ匿名の書が都於郡城内に投ぜられる程であつたが、五年には遂に



都於郡城圖

ニ、サシモ險キ深山ニテ乗物ナド通ルベキ路ナラネバ、奥方姫君ヲ始メトシテ、附従ヘル女中ナド、皆歩ミ習ハ

内山城主野村刑部少輔、野尻の城主福永丹後守は島津勢と通じ、之に應ずるものが多いので、十二月九日義祐は子息祐兵と共に佐土原を出で、新田原に走り都於郡から來會せる嫡孫義賢十一、弟祐勝八、妹阿虎十三、義益未亡人阿喜多夫人、等其他一門の人々と共に、阿喜多夫人が大友宗麟の孫である縁故を辿り、豊後に赴き大友氏に頼らうとし、先づ米良山中に向つたが、

ヌ山路ニ足ヲ傷テ流ル、血ハ鞋ヲ染メ、一足遅ルレバ追付參ラスルト能ハズ、女中ナド自害シテ泣キ號ブ聲凄シク聞エテ哀レナリシコトドモナリ」と艱苦を重ねた次第は、『日向纂記』卷九に委しく見えてゐるが、高千穂その他各地を通りぬけて、翌六年正月宗麟の居城臼杵に辿りつき、其の世話となることになつたのである。

此の都於郡落の際、満所も多分其の父母など、共に行を同うし、豊後に落ちたこと、思ふが、彼は義賢の弟祐勝シエロムと同年の八歳(若しくは十歳)で、具さに雪中敗慘の身に忍び落る艱苦を嘗めたに違ひないが、豊後に於いては義賢、祐勝及び阿喜多夫人は宗麟が臼杵の居城に厄介になり、義祐、祐兵等は臼杵から三里ばかり離れた野津大野郡の光明寺に居ることゝなつた。その後義祐は故あつて天正七年豊後を去つて伊豫道後に赴き、最後には落魄して十三年泉州堺の浦に客死したが、満所は他の人々と共に引きつゞき宗麟の許に居り、當時已に受洗して吉利支丹宗に歸依して居たフランシスコ宗麟等の感化によつて、伊東の一族と共に義勝と手を携へて遂に洗禮⑩

を受け、自らはマンシヨ(Mandic)義勝はジエロームの靈名を授けられ、天正十年ワリニヤーニ師が遣歐使節派遣の企てに際しては、義勝が當時遠く安土の學林に居つたので、急の間に合はず、其代りに満所が宗麟の使節として赴くことゝなつたのである。之を見ても義勝に次いで、彼が如何に宗麟の信任愛寵を得て居たか、分かる。此の時彼は已に臼杵の學林から天正七年には有馬に出來た學林に入り、⑪教理の外に外國語其他の教養をも受け、使節として選に入る可き資格は充分あつたのである。

四、飢肥報恩寺の伊東家墓塋

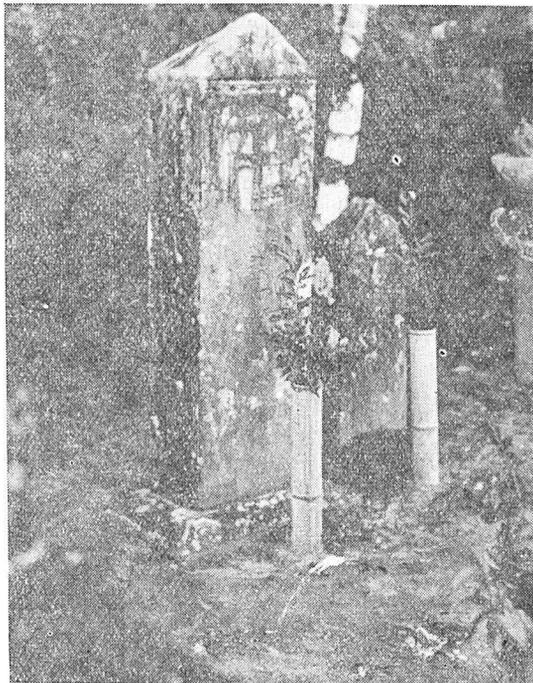
伊東氏が都於郡落ちから十一年目、丁度マンシヨ祐益が羅馬に滞在在中、豊臣秀吉に出仕して軍功あり、遂に日向會井に封ぜられてゐた伊東義賢は、天正十六年五月飢肥の城に移ることゝなつた。此處はかねて義祐時代に屢々島津氏と戦つて争奪を繰返へした處であるが、今や伊東氏が之に落付くことになつたのは、定めし愉快の事であつたらうと思ふ。しかし此の時満所の父祐青は已に世

にあらず、其の未亡人町上夫人は他の伊東氏一門の人々と共に飢肥に移り住み、天正十八年七月廿一日満所等一行が八年目に長崎へ歸着した時、其の報を得て遙々長崎に出かけたのであつた。町上夫人の墓が近

年飢肥楠原報恩寺の境内伊東氏の墳塋中に、

飢肥史談會の山之城民平翁の手によつて發見せられたことが新聞紙に見えたので、私は先頃同氏に書を裁して其の詳細を承り、又た墓碑の拓本をも贈られたが、今や機を得て親しく之を訪ふことが出来たのは嬉しい極みである。

十二月二十四日の朝八時半、今日は瀬之口氏の外に妻中學校長松本君をも加へて三人、縣の自動車の厚意によ



(眞寫田濱) 碑墓人夫上町

つて飢肥に向つた。今日も朗かに晴れ渡つた冬の日を、浪靜かなる日向灘の短亭曲浦を打ち過ぎて、青島近くから海岸は真岩の層が平行線上に浪打際に顯はれてゐる奇

觀を眺めつつ、鷗戸神宮の裏山を通つては、

會て黒板先生等と共に元且宮崎から縣廳の「ランチ」を出してもらつて神宮參拜に出かけたが、海が荒かつたので同伴した宿の女中も我々もスツカリ船に酔つてしまつた大正二年の元且のことを思ひ、飢肥に着いたのは十時

頃であつた。先づ町役場を訪ひ、わざわざ出て來られた山之城翁の東道で、直に報恩寺の伊東氏の墳塋に赴くとにした。これは飢肥の西郊酒谷川の對岸にあり、今寺

は廢して伊東氏を祭祀する五百禊神社の裏にあり、石段を登つた一廓に石柵を廻らしてある。『日向古跡誌』に「其ノ西側稍々低クシテ石垣ヲ環ラシ、一區域ヲナセルハ、支族祐信家族累世ノ墓ナリ、其ノ北側ノ平地ニ散列セシ三層礪及ビ巨礪ハ伊東祐國及ビ其ノ支族祐崇以下、伊東家臣右族ノ墳ナリ、又其西側ニ散列セシハ伊東氏兒童侍妾及ビ士民一般

ノ墓ナリ」とあるが、山之城翁の説明に依れば、正面奥に横に並んだ一列の石塔の右方前に縦に並んで

ゐるのは夫人等の墓、その前にあるのが佻肥へ來てからの國主の墓、左方前手に縦に並んでゐるのが殉死者などの墓であると云ふ。翁は正面一列の石塔の左端の前方に北面して立つてゐる粗末な一碑を指して、これこそ満所の母町上夫人の墓であると云はれた。高四尺三寸、幅一尺三寸、厚九寸、頂上山形をなし、其の下に圓中卍字を



町上夫人墓碑

彫出して、其の下に「對月妙益大姉」、左右に「寛永元年七月十五日」と分書してゐる。これは伊東氏系譜中義祐の子女中義益の妹の條に

伊東修理進祐青妻
女
號町上、福永殿、石塔報恩寺ニ有
法名對月妙益、寛永元年甲子七月十五日

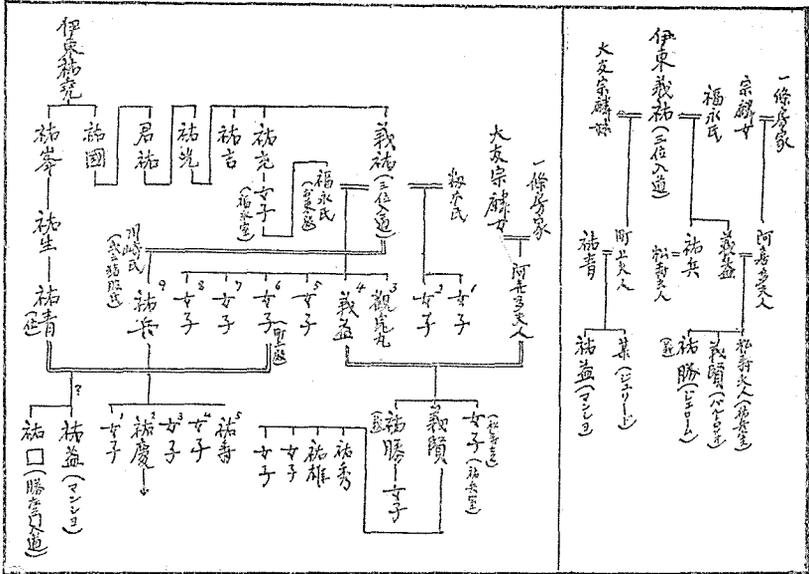
とあることを見出して考定せられたのであるから、これが町上夫人の墓礪であることには疑ない。

正面一列の二重石塔の中央には「心關宗安公大禪定門」とあり、満所の父祐青の塔であると云ふが、城外の

墓群中には、町上氏のと同じ形の碑で「臨江久濟居士、慶安元年戊子五月十二日、伊東勝左衛門入道」と刻したのがある。是は伊東氏系譜に祐青の子とあるから、満所の兄弟に當るべき人である。

忙がしい中を私は町上氏の墓碑の寫眞を撮り拓本などを作り、近くにある小村侯の墓を見ることも忘れて、や

(B) 伊東系氏東伊 (A)



がて舊城址に向ひ、安井滄洲息軒先生の振徳堂の前を過ぎたが、伊東子爵の邸をも訪れる暇なく、町役場に引返へした。幸ひ山之城翁の好意に由つて、舊家老格の伊東直記氏所藏の伊東家系譜の寫本を町役場に於いて見ることを得たのは嬉しい。而かも翁の言に、此の系譜などから考へると町上夫人が今迄云はれてゐる様に、大友宗麟の妹の女であることは頗る疑はしい。已に前に抄出した如く、又た『日向記』などにもある如く、町上夫人は福永腹とあつて、即ち義祐の姉が福永源兵衛の妻となつて、其間に生れた一女子が義祐の夫人となり、お東殿と呼ばれたのであるが（法名湛江妙存、慶長十六年二月九日歿、石塔長持寺）若しも其れが日高氏などの説の如く、實は宗麟の妹の女であるとすれば、寧ろ家系上誇る可きこととして、決して隠蔽する必要はなく、記さる可き筈であるとは、如何にも尤もと思はれる。それ故日高文學士が考定せられ、私も『天正遣歐使節記』などに引用し、廣く行はれてゐる系譜(A)は誤りであつて、種々の點は宜しく(B)の如く改む可きものであらう。(上圖)

實にや前にも擧げた滿所が羅馬市民權授與の決議文には「都於郡王の子、日向王の娘に由りての外孫」と云はれてゐるから、日高氏の作られた系譜の如くにも考ふ可きであるが、是は羅馬の元老院が誤つて記したものかも知れない。それは大友宗麟(フランチェスコ)が使節出發の際、即ち天正十二年正月十二日附耶蘇會總長アクワビバ(Aquaviva)に宛て持たせてやつた書狀に^⑩

(前) 然者吾等いとこ日向之伊藤せららふにも此度備慈多道留御供可仕之處、當時遠國江居住之間無其儀候、併彼いとこまんしよ渡海申候間、萬端可被添貴意事可忝候(後)略

豊後 不龍獅子虎(花押)
屋形

とあり、宗麟の従弟(實は甥)伊藤セラニモ、即ち祐勝(義勝)は、當時遠國安土の學林にあつて、急の間に合はぬから、更に彼祐勝の従弟たる祐益マンシヨを遣はすとある。祐勝は正しく宗麟の女と一條房家との間に生れた阿喜多夫人の所生であり、又祐勝の従弟たるマンシヨ(祐勝の父義益の妹町上と祐青の子)を遣はすと云つて、マンシ

ヨを直接に宗麟自身の従弟とは云つてゐないのである。而して宗麟から教皇に捧呈した書翰の伊太利原文にも全く同意の、^⑪

「(前)是を以て日向國主の男、即ち我が一女の子たる甥ドン・ジエロームを代りとなし、貴國に遣はさんと欲せしも、今遠地に在り、且つ師父巡察使の歸帆急なるに依り、同じ目的を以て、彼が従弟ドン・マンシヨ(Don Mancio suo consolino)を遣はさんとす」(下)略

とある。之を以て見ると件の市民權決議文に「日向王の娘に由る外孫」とあるは、此の込み入つた關係を不用意に、或は故らに省略若しくは改めたものと思はれるのである。とにかく決議文も有力なる資料ではあるが、宗麟の教皇への捧呈文、耶蘇會總長への書翰、又た伊東氏系譜は更に有力なる證據であるから、なほ將來の研究を期するにしても、我々は現在寧ろ此方の所見に傾くのである。斯の如き重要な疑問と、又た町上夫人の墓碑を發見せられたのは全く山之城翁の賜物であつて、我々の深く同氏に感謝する所である。なほ翁の言に町上夫人は或

は町上と讀む人もあるが、それは町の上と讀む可きことの正しいのは、伊東義賢が文祿元年四月十三日、名護屋の陣中くしの津より飢肥城の母公に送つた書翰^⑪（伊東子爵家文書）に「御ひがし殿、町の上殿」など、假名で記してあることに由つて明白であると云はれたが、之れ亦従ふ可きの言である。

私は町上夫人が滿所の歸國を聞いて、千々石ミカエルを迎へた大村有馬の人々などとは遅れて、はるく日向の飢肥から長崎へ出かけたのには、當時幾日位かゝるでせうと尋ねると、七十歳にも近い佐土原老助役は、「自分等が壯年の頃長崎へ出るには、飢肥から牛の峠の嶮阻を越え、都城街道を経て小林・飯野・肥後大畑・入吉に出て、球磨川を下り、八代・熊本・鳥栖を過ぎて行くのであるから、どうしても七日位はかゝつた」との話、當時四十前後の町上夫人は、如何に急いでも是れ以上の日子を要し、其の難儀も亦想像するに足るのである。

町上夫人の生年月と享年とは系譜などにも出て居ないので明かではない。併し彼女の同母兄義益は永祿十二年

（一五六九）二十四歳を以て歿してゐるので、其の出生は天文十五年（一五四六）であり、假に三つ違ひ宛の所生とすれば、次妹（尼公方丈東興庵）は天文十八年、その次の妹に當る町上は天文二十一年（一五五二）の誕生となる。

さすれば滿所は元龜元年（一五七〇）其の母十八歳の時に生れ（四十三歳にて慶長十七年十月三十一日天草にて永眠すと云ふ）、渡歐の時は十三歳となる。そして此の計算によれば滿所歸朝の天正十八年（一五九〇）は町上夫人は四十歳、滿所の耶蘇會に入り出家の身となることを聞いて、失神せんばかりに悲しんだが、その決心は固くして、涙ながらの慈母の諫止も聽かずして、彼女の許を去つてしまつたのである。かくて淋しい月日を、殊には一緒に暮して居つた彼女の生母お東殿が慶長十六年亡くなつて後は、孤影孑然この飢肥の城中に送り迎へて、石碑にある如く寛永元年（一六二四）多分七十四歳を以て逝去したのである。

* * * * *

我々は飢肥の役場を辭して山之城翁を其の家に送り、

伊東家文書を抄出せられた「ノート」を拜借し、お宅で出来た蜜柑を戴き、別を告げて油津に向ひ、深水氏の未亡人の家に藏せられる珍奇なる白鳳頭の銅佛像を拜見し、宮崎への歸途を急いだが、途中青島に車をとめて久方振に其の熱帯植物の葉影に寄り添ひ、四時半神田橋旅館に歸着した。そして女將の寫真を見せてもらひ、靈前に香資を供へて鹿兒島行の汽車に大淀驛から投じたのは午後六時前であつた。會ては同じ驛に女將に送られた身を、今は其の最後の病狀を語るゝ子息に送られて。

鹿兒島から門司行の夜汽車に乗りかへ、廿五日の朝下關に着いたが、其の夕方には千燭光に照らさるゝ桂川古墳の石室内の人となることを得た。

〔追記〕 前文稿了後、瀬之口傳九郎氏から、東諸縣郡八代村なる法華嶽の藥師堂の天井板に、其の造立の趣意を記した伊東祐青の記した墨書の全文を親切にも報知してくれられた。即ち次の通りである。

「奉造立天井一圓之意趣者、武運長久弓箭勝利、諸勢之

軍兵守護、一將之幡箕、譽名於顯天下、無敵退治、他方順治、所望成辨、并仁同姓女所生愛子虎松、女、虎千代、鷹、虎次良鷹、虎龜鷹、各各息災延命、一人諸願、皆令満足、故如件

天正三年乙酉南呂六日

伊東修理亮

藤原朝臣祐青

此の文中に同姓女所生とあるは、瀬之口氏も云はれる如く、伊東宗族の出なる町上夫人を指したものであり、以下の人名は其の所生の子女であらうが、然らば天正三年已に五人(此の名の讀方には諸説があるが)の子女があつたと見なければならぬ。マンショが天正十年十三歳とすれば、天正三年には六歳であり、従つて虎次良鷹或は虎千代鷹が其の幼名であつたと想像せられる。然らば町上夫人り、數人の子を生む爲めには雙生兒や歳子に非ざる限り、少くとも祐青と永祿三四年頃(一五六〇)に結婚したこと、見なければならぬ。すると彼女の歿年寛永元年には八十歳或はそれ以上の老齡となる。

なほ『高岡名勝誌』(文化七年—十一年に薩侯の命によりて記したるもの)に深年村(東諸縣郡八代村)若宮八幡の條に、

「天正二年^{丙子}十一月十三日、伊東修理亮殿藤原朝臣祐書」と

とは、恰も前の法華嶽藥師堂天井板銘の書かれた翌年に當る。此の八代の城は『日向記』にも伊東新三郎城主とあつて、修理亮居城のことは見えざるも、法華嶽と云ひ共に此の東諸縣方面に祐書が深い關係を有して居つたことが想像せられるのである。以上主として瀬之口氏の教示を其儘記して、同氏の厚意を深謝する。

註①『佛教美術』(第四册)拙稿(「前後高田の畫像石」)。

② 拙著『前後磨崖石佛の研究』(京大考古學報告書第九册)。

③ 此の種帆立貝式とでも云ふ可き形式の古墳の大和にもあることは、最近田村吉永君が北葛城村築尾町(北池山塚、同河合村(乙女塚)に於いて注意せられた。『大和志』第三卷第二號)

④ 伊東滿所の祐益なる可きことに就いては、日高重孝君の考證がある。(『史學雜誌』第三十九編第五號)當時伊藤とも常に記したことは、滿所自身の歐州に於ける三四の書狀、又大友宗麟の耶蘇會總長に送つた書翰に由つても知られる。

⑤ 此等地誌及び伊東氏の歴史に就いては、以下凡て主として平部橋岡著『日向古跡誌』、同『日向纂記』、其他喜田、日高兩氏著『日向國史』等に據る。

⑥ 吉田東伍氏『大日本地名辭書』等參照。

⑦ 都於郡城址内に於ける彦火々出見尊の高屋山陵と稱するものに就きては、中村德五郎氏『日本開闢史』を見よ。石棺を有せし石室古墳の如く、其の性質は想像するに足る。

⑧ 伊東氏居城時代の都於郡城の古圖と思はるゝもの、元と都於郡附近の黒貫寺の所藏にあり、中村德五郎氏の『日本開闢史』中に縮寫して登載せられたり。今更に之を抄寫して本篇に掲ぐることにせり。

⑨ 『宮崎縣史蹟調査』(兒湯郡)中にある寫眞を轉載す。これは西南方より望見せるものなり。

⑩ 天正七年義益の未亡人阿喜多夫人は、祐益の母町上夫人等と共に同時受洗せりと云ふも、これは形式的のものに過ぎず、其の信仰は永續せりとも思はれず。(スタインシエン切支丹大名記)

⑪ クラツセー『日本西教史』に「有馬の學林には貴族の子第二十八人あり、其中に日向國主の公子もあり」とあるは、祐益マンシヨを指せるものならむ。

⑫ 義賢は朝鮮役に出征し、病を獲て歸國の船中に歿し、壹岐風本長徳寺に葬る。享年二十七、法名龍山全休と云ふ。

⑬ 山之城氏所抄伊東系譜に據る。

⑮ 例へば拙著『天正遣歐使節記』の外、川添重廣氏『伊東滿所』(昭和六年)等皆之を襲用せり。

⑯ 山之城氏所抄伊東系譜等に本づきて作る。但し此等は皆祐青の子に祐□のみありて、祐益の見えないのは西教者たりしを以て、故らに省略せしものならんか。

⑰ 幸田成友博士『和蘭雜話』中「明後大友フランシスコの手紙」参照。

⑱ グアルチエリ、ベルシエー等譯文小異あり、今後者に従ふ。

⑲ 拉丁文はムカシテヨに見えてゐる。(拙著『天正遣歐使節記』註参照)

⑳ 山之城氏抄本伊東義賢書狀(伊東子爵藏)に據る。これは安井忠軒の跋ある副本に據られたものであるが、文祿元年四月名護屋陣中より、母公其他内儀の人々に送られた假名消息であつて、名護屋附近の混雜繁昌、加藤小西の反目等より、種々當時の機密内情等を記し、之に副へたる翌年二月朝鮮松山よりの消息の太閤に對する感想、士氣などを忌憚なく記したものと共に、此種史料中他に類を見ざる興味あるものである。前者には末尾に「此文人々には御見せあるまじく候火中」とあり。何かに已に發表せられてゐるか否かを未だ知らない。